



## 「御用留」の性格と内容 (一)

——武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討——

森 安 彦

### 目 次

はじめに ——史料論の一視点——

#### 一 「御用留」の機能と成立

- (一) 「御用留」の機能
- (二) 「御用留」の成立

#### 二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」

- (一) 「田中家文書」の概要
- (二) 「御用留」の存在

#### 三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討

- (一) 「御用留」の存在状況
- (二) 「御用留」の記載内容

「御用留」の性格と内容 (一) (森)

#### 四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討

- (一) 「御用留」の存在状況
- (二) 「御用留」からみた農民夫役
- (三) 「御用留」の記載内容

#### 五 文化四年～文政四年「御用留」の検討

- (一) 「御用留」の存在状況
- (二) 農民夫役の激増と歎願運動

(未完)

## はじめに——史料論の一視点——

史料の属性には二つの側面がある。一つは史料の存在・形態にかかわるものであり、もう一つは史料の意味・内容にかかわるものである。すなわち、前者は史料がどのような歴史的諸関係の中で作成され、存在してきたかという史料の成立と機能の側面であり、後者は史料自身が表現している歴史的事実であり歴史研究の素材となる側面である。別の表現でいえば、前者は史料が、作成された時代の現用記録として有効性を発揮していた時の役割・機能の側面であり、後者は、現用記録としての有効性を失うが、同時に過去の「史料」として、歴史研究の素材として、新生命をもってくる段階である。

それ故、いかなる史料も現用記録として存在していた時期を経過することによって、はじめて「史料」になりうるのである。

歴史研究は、「史料」がかつて現用記録として機能していた役割とは無関係に、「史料」の中から、さまざまな事実を引き出し活用し歴史像の構築に役立っているのである。

近世史料学の一つの視点として、かつて「史料」が現用記録として発生し、存在していた側面を説明しておくことはそれなりに意味のあることではなからうか。すなわち、「史料」の非歴史的な恣意的解釈を防止することに役立つことになるのではなからうか。

このような立場から近世文書の中でも、比較的に一般的に存在している村方の「御用留」をとりあげて、史料論的考察を試みようとするものである。

具体的には、江戸周辺村落の一つである武蔵国荏原郡上野毛村（現在東京都世田谷区）「御用留」を検討対象とするものであるが、その検討に入る前に、「御用留」の機能と成立について、先学の業績を手がかりに若干の考察を試みたい。

## 一 「御用留」の機能と成立

### (一) 「御用留」の機能

「御用留」という史料について、これまでどのような把握がなされてきたのであろうか。すなわち、どのような概念で理解してきたかということを、二、三の事例でみることにしたい。

木村礎氏は『新版郷土史辞典』で「御用留」についてつぎのように記述している。<sup>(1)</sup>

江戸時代地方帳簿の一つ。「御用留帳」「御用向控帳」「触留帳」など各種の称がある。領主からの触書・廻状をそのまま書き留めているのが最も普通のタイプだが、その他に村内からの請書や願書を書き加えたものもある。村（具体的には名主）は触書や廻状を受取ると、それを一読して村名の下に印を押し、隣村に廻わしてしまう。

したがって後日の考察のために控えを取っておく必要がある。触書や廻状の頻度が高くなればなるほどその必要が生じた。このような理由で「御用留」が仕立てられた。享保期以降、触書・廻状が頻発されるに従い「御用留」は一般化した。「御用留」の内容を体系的に調べるとその地域の問題点がよくわかる。また時代の変化も「御用留」はよく反映している。

また、大野瑞男氏は『国史大辞典』でつぎのように記載している。<sup>(2)</sup>

江戸時代の名主・庄屋などの村役人が村政執行上必要な文書や諸事項を書き留めた帳簿。村方の「御用留」は領主・代官から下達された触書・廻状や達書・申渡書・差紙などと、村方から上申した願届書、近村役人との相互文書を控えとして記録したものであるが、日記形態の「御用日記」もある。また下達文書のみを記録した「御触留」・「廻状留」など、上申文書のみを記録した「願届書留」などは「御用留」が分化したもので、これらも「御用留」と表記されている場合もある。

記載内容は法令・示達のほか、年貢・諸役・助郷・夫食・拝借・用水・普請・鷹場・農耕に関するもの、村民の出生・死亡・婚姻・旅行などの願届・訴訟や係争に関する記録など多岐にわたるものがある。<sup>(3)</sup>また、大口勇次郎氏は「天保期の御用留」で、つぎのように述べている。

「御用留」というのは、本来、領主の「御用」について書き留めた帳面という程の意味であるから、定まった様式があるわけではないが、ふつうは「御触留」とも別称し、領主から布達回覧される触書類を、村名主が書き写した控を指している。しかし触書類のほか、領主御用に関するものであれば、他村からの書簡類をもあわせ載せている。(中略)

幕府が制定した触書のうち、その必要のあるものは、代官所を通じ廻状の形式をもって村に伝達された。以上の三者の記述から「御用留」の性格を抽出すると、つぎようになる。

- ① 領主からの触書・廻状・「御用」等について書き留めたもの。
- ② その他に、村内からの願書・届書・近村役人との相互文書を控えとして記録したもの。
- ③ 廻状形式によって村に伝達された触書・「御用」を一読して、隣村へ廻すに際して、その控えとして記録したもの。

これによって、「御用留」が発生した必然は③にあり、領主らが触書を廻状形式で伝達するという支配方式が確立した段階に作成されたものであることがわかる。その結果①となり、②が付随的に記録されていったものと考えられる。

兵農分離を根幹とする近世の領主支配が、小農村落が確立した段階で、村を組合せて組合村を編成し、触書などを組合村組織を通じて流し、伝達の徹底を計ったところに、「御用留」という史料が成立する必然があったと仮定しても、そう誤りではないのではないか。

では一体、いつ頃から「御用留」は出現するのであろうか。前述のように木村氏は「享保期以降、触書・廻状が頻発されるに従い『御用留』は一般化した」と指摘している。

以下管見する非常にせまい範囲であるが、「御用留」の成立する時期を検討してみたい。

## (二) 「御用留」の成立

さて、「御用留」と言う史料が、いつ頃から出現するかということを、「古文書目録」や「史料集」の中から探り出すと、さしあたり、年代的に一番古いものは、武蔵国足立郡南村（現在埼玉県上尾市）の元禄六年（一六九三）「御触状留帳」であり、同村には、これにつづき宝永三年（一七〇六）「御用留帳」以下正徳・享保から寛政期まで一部欠損はあるが七二冊揃っている。<sup>④</sup> ついで古いものとしては、出羽国村山郡山家村（現在山形県東村山郡天童町）の元禄一七年（宝永元年、一七〇四年）「諸事御用留帳」であり、同村にはこれにつづき宝永六年（一七〇九）「諸事覚帳」、同七年「諸事留」と続くが名称は不統一である。それが享保二〇年（一七三五）「御用諸事留書帳」となり以後「御用留帳」「御用状留帳」などとなり明治五年（一八七二）まで一一八冊が現存している。<sup>⑤</sup>

これにつぐものとしては、武蔵国多摩郡下師岡村（現在東京都青梅市）の宝永六年（一七〇九）「御廻状留帳」であり、同村には宝永六年以降天保七年（一八三六）までの二二八年間に約九〇冊分の「御廻状留帳」が揃っている。宝永六年「御廻状留帳」の触書の末尾には「此書付一二月廿日上師岡々請取、即刻新町へ相渡者也」とあり、表題どおり「廻状留帳」であることが判明する。

木村氏の指摘のとおり、享保期（一七一六～一七三五）に入ると「御用留」を所蔵する村が目についてくる。武蔵国荏原郡下丸子村（現在東京都大田区）では享保二年（一七一七）「御廻状写」から明治三年（一八七〇）「御用触留帳」まで、一五四年間に八六冊分が存在している。そのうち享保四年（一七一九）は「御鷹場ニ付村方へ被仰付候証文」（縦帳）という名称であり、同七年（一七二二）も「御拳場御鷹野御触状写帳」とあり、鷹場「御用」を内容としたものである。同八年以降は「御用触留帳」「諸事御用留帳」等の名称であるが、鷹場関係「御用」の記載が少なくない。これは後述するように、享保元年（一七一六）八代将軍吉宗の鷹場の復活政策により、鷹場組合の設定と触次制度の成立と深い関連性をもつものである。

江戸周辺の関東諸村では「御用留」の一般的成立とその機能は、吉宗の鷹場の整備にともなう農村支配の再編成と連動しているものと想定できる。

以下具体的に、上野毛村「御用留」をとりあげて検討してみたい。

## 二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」

### (一) 「田中家文書」の概要

上野毛村「御用留」は同村の名主田中家の所蔵文書の一部として存在しているものであり、ここでは、「田中家文書」の簡単な概要を紹介し、検討対象とする「御用留」がどのような文書群の中に存在しているものであるかを明らかにしておきたい。

「田中家文書」は、先述のように武蔵国荏原郡上野毛村名主田中家に襲藏されたものであり、現在は東京都世田谷区立郷土資料館に寄託されている。<sup>8)</sup>

「田中家文書」の特色は文禄三年（一五九四）一〇月の「武州荏原郡世田谷領之内上野毛郷御縄水帳」（三冊）を最古として、明治初年に到る近世文書が、ほぼ全時代に継続して保存されていることである。これは田中家が上野毛村の世襲名主として近世初期より明治維新まで存続したことによる。また文政改革では大組合惣代を勤めていたので、文政改革や組合村に関する史料も大量に存在しており、総点数は二二〇〇点余りである。

なお、上野毛村の領主支配関係は天正一八年（一五九〇）から寛永九年（一六三三）までは徳川氏直領であり、寛永一〇年以降幕末までは彦根藩領に属した。それ故ここで検討する「御用留」は大名井伊家支配のものである。

### (二) 「御用留」の存在

田中家の「御用留」は享保五年（一七二〇）から明治一〇年（一八七七）までの一五八年間に一二三冊が現存してい



る。一番古い享保五年は「御鷹用留帳」という名称であり、二番目に古い享保一〇年（一七二五）のものが「御用留帳」とあり、さらに宝暦二年（一七五二）・同四年が「万日記」であり、同八年から寛政六年（一七九四）正月分までの一六冊が、すべて「御用日記」となっている。また寛政六年八月分は「諸御用廻状留日記」（二番）、同六年一〇月分は「御用廻状留日記」（三番）となっている。文化十一年（一八一四）分以降慶応四年（一八六八）分までは「御用状留記」となり、明治元年（一八六八）分から同一〇年（一八七七）分までが「御用留」「御用留帳」と表記されている。このように、いわゆる「御用留」と一括しているものも、具体的にみると、多様な表題が付けられており、その内容記載形式にも若干のニュアンスの相違があるようである。すなわち、「万日記」「御用日記」などは、日附を冒頭に揭示するような形式が目立つなどであるが、実際の記載内容は、ほとんどかわらないとみてよい。

さて、「御用留」の記載内容の特徴は、次節以下で具体的に検討するが、ここでは、簡単に上野毛村「御用留」に關して概括的に提示しておこう。

前述の大口氏の指摘にあるように、「御用留」は領主から村落農民に対する、多様な「御用」を書き留めたものである。「御用」とは、農民に背負わされた諸負担のことであり、それは大別して田畑にかかわる本年貢と農民の労働力（夫役）を徴発する諸役負担、その他領主の生活上必要な諸物資の徴達の三通りがある。年貢関係については、「年貢割付状」「年貢皆済目録」「年貢勘定帳」などの一連の年貢関係文書が作成されるのに対して、労働力や諸物資の収奪については、特定の形式や文書は存在せず、まさに、この「御用留」の中に記録されているのである。それ故「御用留」は本年貢以外の諸負担の記録簿という性格をもつものである。上野毛村の「御用留」の一番最初のものが、「御鷹用留帳」と表記されていることが、それを象徴的に物語っているといえよう。ここには、江戸周辺の「御鷹場」に編成された上野毛村をはじめとする世田谷領諸村の鷹場に関する諸負担が具体的に記録されているので

ある。

「御用留」には鷹場負担以外にも助郷負担、用水維持負担等が多様に記録されている。勿論、「御用留」には、これら諸負担の記載のほかに、幕府の触書や手配書としての「人相書」、村方から領主に提出した訴状など多彩な記録が満載されている。

「御用留」は、今日のいわゆる「六法全書」的な利用もなされていたのである。名主らはしばしば、過去に通達された触書を繙き、諸事象に対応していたのである。それ故、触書を書留める必要性があったのであり、村方史料のもっとも基本的なものの一つとして作成され、具備していたのである。

さて、本稿では、以下上野毛村「御用留」を三つの時期に区分して、具体的に検討してみたい。すなわち、享保五年（一七二〇）から寛政六年（一七九四）までの一八世紀の前半から末期まで七四年間の時期、ついで寛政七年（一七九五）から文化四年（一八〇七）までの一三年間の時期、最後に同四年から文政四年（一八二二）までの一四年間の時期である。第一期は間隔は長いが、「御用留」の記述は疎略であり一冊分の項目数も比較的少ない。それに対して、第二期・第三期とも記述の密度が高く項目数も激増している。なお、この時期区分は便宜的なものである。

文政五年（一八二二）以後明治一〇年（一八七七）までの時期の「御用留」に関しては、続稿でとりあげることとしたい。

## 三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討

## (一) 「御用留」の存在状況

享保五年（一七二〇）から寛政六年（一七九四）までの七五年間に、上野毛村の「御用留」は二二冊分が存在している。この二二冊の表題年月、表題、収載年月、収録項目数を一覧表にしたものが第1表である。

これによると、享保五年から寛政六年までの間で比較的年代的に揃っているのは宝暦元年（一七五一）から明和三年（一七六六）までの一五年間であり、その前後は間欠的に存在しているに過ぎない。その中でも寛政六年分は三分冊となり収録項目数は一五八と充実している点が注目される。この寛政六年は、井伊家世田谷領の中興の代官となった大場弥十郎が就任し、代官として世田谷領村落の再興に着手する時であり、「御用留」記載の充実は弥十郎の登場との関連が予想される。<sup>10)</sup>

さて、この間で「御用留」が長期に欠損している時代は享保一二年（一七二六）から寛延二年（一七四九）までの二四年間と、安永三年（一七七四）から寛政三年（一七九二）までの一七年間である。すなわち「御用留」は一八世紀の中葉は比較的揃っているが、一八世紀の前半と後半が欠如している。この欠如がどのような理由によるものかは、にわかに判断できないが、他の年貢関係の文書等は、この期間でも揃っているので、名主役の交替などによるものではないなさそうである。

では、次にこの二二冊の「御用留」の記載内容について若干紹介してみたい。ゴチックの和数字は第1表の「御用留」の番号に照応しているものである。

第1表 享保5年～寛政6年上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表 題	収 載 年 月	収 録 項目数	備 考
1	享保5年正月	御鷹用留帳	享保5年1月～12月	46	享保6年～9年まで欠損
2	享保10年正月	御用留帳	享保10年1月～同12年10月	61	享保11年～寛延2年まで欠損、延享3年～同4年は断簡故省略
3	寛延3年正月	御用留帳	寛延3年1月～宝暦1年閏6月	22	宝暦1年7月～12月まで欠損
4	宝暦2年正月	万日記	宝暦2年1月～同3年4月	53	宝暦3年も前欠損故省略
5	宝暦4年正月	万日記	宝暦4年1月～11月	78	宝暦5年は欠損
6	宝暦6年正月	御用留帳	宝暦6年1月～12月	39	宝暦7年は欠損
7	宝暦8年正月	御用日記牒	宝暦8年1月～12月	37	
8	宝暦9年正月	御用日記	宝暦9年1月～12月	45	
9	宝暦10年正月	御用日記	宝暦10年1月～12月	38	
10	宝暦11年正月	御用日記	宝暦11年1月～11月	49	
11	宝暦12年正月	御用日記	宝暦12年1月～12月	33	宝暦11年12月の1項含む
12	宝暦13年正月	御用日記	宝暦13年1月～12月	41	
13	宝暦14年正月	御用日記	宝暦14年1月～12月	42	
14	明和2年正月	御用日記	明和2年1月～11月	22	
15	明和3年正月	御用日記	明和3年3月～10月	22	明和4～6年まで欠損
16	明和7年正月	御用日記	明和7年6月～同8年8月	29	
17	安永2年正月	御用日記	安永2年3月～同3年2月	16	安永3年3月～寛政3年まで18年間欠損
18	寛政4年正月	御用日記	寛政4年1月～8月	48	寛政4年9月～12月欠損
19	寛政5年正月	御用日記	寛政5年1月～8月	56	寛政5年9月～12月欠損
20	寛政6年正月	御用日記	寛政6年1月～9月	82	} 寛政6年完揃
21	寛政6年8月	諸御用廻状留日記	寛政6年9月～11月	30	
22	寛政6年10月	御用廻状留日記	寛政6年11月～同7年1月	46	

(注) 上記「御用留」22冊は「世田谷区史料叢書」第1巻(東京都世田谷区教育委員会、昭和60年)に収録されている。

## (一) 「御用留」の記載内容

一 享保五年（一七二〇）「御鷹用留帳」は同年正月から二月までの一年間で四六項目の事項が記載され、表記のとおり鷹場御用が中心である。江戸周辺の鷹場は、鷹場組合が編成されており、組合ごとに触次名主が置かれていた。井伊領世田谷二〇か村のうち、上野毛村・尾山村・野良田村・瀬田村・岡本村・鎌田村・大蔵村・宇奈根村（いずれも現在世田谷区内）など玉川流域八か村の村々は荏原郡下沼部村（現在東京都大田区）触次名主四郎左衛門配下に属していたことが判明し、「御鷹用留帳」の記載の多くは触次名主から廻達された御用人馬の徴発や鷹場の整備、維持管理に関するものである。

享保期に江戸周辺村落文書に「御用留」が出現してくる背景には鷹場の設置が深く関係していると考えられる。享保元年（一七一六）吉宗は將軍に就任すると、いわゆる「享保の改革」の第一歩として士風の刷新をはかる目的として、さきに「生類憐みの令」によって廃止された鷹場を復活し、みずからすすんで鷹狩を実施した。同年九月、寛永年間（一六二四～四三）に設定された沼部・世田谷・中野・戸田・平柳・淵江・八条・葛西・品川の九領にわかる旧鷹場をあらためて「御留野」とし、同地域より四、五里の範圍を禁猟区とする旨の触れを發した。その後、享保三年（一七一八）には江戸近郊九か領を改めて、葛西筋・岩淵筋・戸田筋・中野筋・目白筋・品川筋の六筋に改編し、その統制が強化された。世田谷地方はこのうち目黒筋に編入され、荏原郡上目黒村（現在東京都目黒区）の御用屋敷内の鳥見役所の管轄下に属した。この目黒筋は荏原郡馬込領・世田谷領・麻布領・品川領八三か村と江戸町方に属する三五町にまたがっていたが、これら諸村は領主関係を越えた一つの鷹場組合村をつくり、江戸周辺を掌握しようとする幕府支配の一環をなしていたのである。この組合村の中心となるのが触次名主である。触次名主は鷹野役所よりの御用状を組合村々へ触次ぎ、また鷹野役所より、將軍御成の節の御用人足、蟪・松虫・螢・杉の葉等の御用のある時は、

各村々へ通達し、上納等を掌るのである。上野毛村の場合この触次廻状を書留めるものとして「御鷹用留帳」が成立し、さらにこれが鷹場「御用」以外の「御用」も記載することによって、「御用留」として定着したのであると考えられる。

享保五年「御鷹用留帳」には、鷹場関係以外にも、例えば同年四月二五日には関東郡代伊奈半左衛門の命により、玉川のうち瀬田村から下沼部村までが「御留川」に指定され、この間では諸魚獵をいっさい禁止とする高札が建てられた。

同年七月一三日には、六郷領村々は大渴水となり、六郷用水の総点検が実施され、余分な引水が行われていないかどうか嚴重な調査が実施されている。

二 享保一〇年「御用留帳」では、六郷用水に関して、田中休愚が普請か所の点検や整備拡張を実施している様子が記載されている。

三 寛延三年「御用留帳」には正月早々の記載に、国々私領の百姓の強訴・徒党・逃散停止の公儀触書が見られる。これは「国々私領之百姓年貢取箇、或ハ夫食種貸等之願筋ニ付、領主・地頭、城下・陣屋又は門前江大勢相集り訴訟致候義間々有之候由相聞候」と具体的に指摘しており、この法令は当時幕府をはじめ私領の諸大名の年貢増徴政策に対する農民の抵抗が全国的に展開していたことを示唆している。宝暦元年（一七五一）三月には井伊家世田谷領内の村々が凶作で食料に欠乏していることを代官所へ訴え、麦稗の拝借を出願している。

四 宝暦二年「万日記」の宝暦二年正月一日には、上野毛村から七人の者が伊勢参りに旅立つ記述があり、同村名主左内（田中氏）の箱根関所宛の道中手形も記載されている。さらに同三年正月一五日にも五人のものが伊勢参りに出発している。宝暦二年五月二七日には、六郷領村々が大渴水となり、和泉村用水入口を「堀入」し、さらに、上

流村々では用水取入口を「差留」することを依頼した通達が八幡塚村七蔵から回達されている。七蔵は用水水組合触次役である。

五 宝暦四年「万日記」の五月二日には、將軍家重（大納言）が瀬田川原へ「御成」になり、「天氣好殊之外御機嫌よろしく御歸り被遊候」とある。前述のように瀬田村から沼部村までの間の玉川は「御留川」として漁獵が禁止され、將軍らの遊覧の場となっていたのである。

同年一〇月二九日には、宇奈根村市郎兵衛（荒井氏）が井伊家家老脇五右衛門・木俣土佐から平生の玉川筋の勤務を賞賛され、苗字帯刀を許され、世田谷御領分玉川筋川除御普請肝煎役に任命されたことが記載されている。

八 宝暦九年「御用日記」の一〇月二〇日には、世田谷代官飯田平兵衛が隠居を出願し、「跡役」は新左衛門が就任した。この交代に際して世田谷領村々の名主は「御祝儀」に出むいている。

九 宝暦一〇年「御用日記」の二月二七日には、翌二八日井伊家殿様が豪徳寺へ参詣するので、井伊領二〇か村の名主は、慣例通りに羽織・袴を着用して、上町の大場代官屋敷に参集するよう代官所からの廻達が出されている。同年五月五日には、六郷用水が渴水し、六郷領村々の苗は枯失したとし、六郷領の名主は昼夜をかぎらず用水堀通を見廻わり、用水の流れが滞っていないかどうかを急点検している。この触書が六郷領触次八幡塚村七蔵から廻達されている。

一〇 宝暦十一年「御用日記」の五月二三日には、六郷用水に関して「六郷用水堀ハ慶長三年ニ小泉治太夫様と申御代官堀り被申候由にて川崎堀も此節堀ラレ申候」とある。「川崎堀」とは、玉川の対岸の稲毛・川崎二か領用水を指したものである。

同年五月には喜多見村と六郷領三六か村との「出入」記載がある。それによると、喜多見村は「六郷用水堀ニ石籠

沈メ堰を致し水引申候儀、此洗堰之義先々有之哉又は近年致候義か」というのが争点であつた。これに対し隣村の和泉・猪方・岩戸・大蔵の四か村は、昔からあつたと喜多見村に同調し、岡本・瀬田・上野毛・下野毛・小山の五か村は、遠方の村々などで判定できないと答えた。これをもてみるように、世田谷領村々は上流に位置し、下流の六郷領村々と真向から対立していたのである。

一三 宝暦一四年「御用日記」の九月二一日には、世田谷領代官大場六兵衛の死去を世田谷村名主政右衛門が通報し、それを受けて、同代官飯田平兵衛がその旨を村々名主に当てた回達が収録されている。葬礼には、二〇か村名主全員が袂を着用して野辺送りをし、香典は二〇〇文ずつ出している。

一四 明和二年「御用日記」の二月一一日には、御鷹場組合触次役池沢村弥惣兵衛が死去したので、後任の触次役の選任の相談がなされ、その結果、粕屋村太郎兵衛触下に編入されることを関東郡代伊奈半左衛門に出願している。その訴状によると、井伊家世田谷領一九か村は御鷹場懸り御用は、二分され、九か村は粕谷村吉郎兵衛触下にあり、残り一〇か村は池沢村弥惣兵衛触下にあつたが、この際一九か村は一体となつて粕谷村吉郎兵衛触下に編入されたい、ということである。池沢村弥惣兵衛触下の一〇か村とは、世田谷・弦巻・用賀・野良田・尾山・下野毛・上野毛・瀬田・馬引沢・太子堂の各諸村（いずれも現在世田谷区）である。この出願は許可されたようである。

一六 明和七年「御用日記」の四月には、「公儀書付之享」として、徒党・強訴・逃散禁止の触書が収録されている。同八年二月には奉公人給金が高値になつたとして、二両一分が平均額だが、月に一〇〜一五日労働する場合は二両二分、二〇〜二五日まで労働する作男は一両三分まで、女は三分までと「近領定之沙汰」として粕谷村吉郎兵衛かに通達されている。果して、実際はどの程度であつたかは、ここには記載されていないので判明しないが、女性給金の低さが注目される。



一八 寛政四年「御用日記」二月一〇日には、江戸の桃町辺で出火し大火の様子なので、世田谷領村々より早々人数を出し、井伊家上屋敷に駆付ることを命じた代官所からの示達が記載されている。江戸周辺に配置された井伊家世田谷領村々の役割として、江戸上屋敷の不測の事態に対応することが要請されていたことが判明する。これより後の天保改革の上知令で世田谷領村々が幕府に上知されることに井伊家が反対した理由に、世田谷領のこのにより役割を強調している（旧王禪寺村名主志村家文書）。

一九 寛政五年「御用日記」の正月二十四日には、「大場半蔵儀今廿四日被仰<sub>二</sub>出大場源吾跡敷<sub>一</sub>并御役儀共無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>被仰付<sub>二</sub>此段相心得<sub>一</sub>件之通可<sub>二</sub>被<sub>二</sub>申渡<sub>一</sub>候、以上」とあり、源吾の後任に本郷半蔵が大場半蔵として代官職に任命された記載がみられる。同年四月には「公儀御触書之享」として、寛政改革の重要施策の一つである旧里帰農令の全文が収録され、公料のみならず大名領等の私領にも布達されたものであることが判明する。

二〇 寛政六年「御用日記」二月には、武蔵国の地誌調査のために古河平治兵衛らを派遣した旨の通達が記載されている。これが、文化・文政期に完成し、「新編武蔵国風土記稿」に結実するものである。当時老中松平定信は、いっぽうでは家臣団の再統制を企図して「寛政重修諸家譜」を編さんするとともに、いっぽうでは国単位の民情を把握するために、大規模な地誌編さんにも着手したのである。

同年四月二〇日には、代官大場半蔵の後任として、大場弥十郎が同月の一九日に代官職に任命された申渡書が記載されている。

#### 四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討

##### (一) 「御用留」の存在状況

本節では、寛政七年（一七九五）から文化四年（一八〇七）までの三年間の「御用留」一八冊を検討対象としたい。

さて、この一八冊の「御用留」の表題年月、表題、収載年月、収録項目数を一覧表にしたものが第2表である。

第2表 寛政7年～文化4年上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表 題	収 載 年 月	収 録 項 目 数	備 考
1	寛政7年正月	御用日記	寛政7年1月～3月	31	} 寛政7年完揃
2	寛政7年3月	諸御用日記廻状	寛政7年3月～7月	50	
3	寛政7年8月	御用日記留	寛政7年7月～12月	38	
4	寛政8年9月	御用日記	寛政8年9月～11月	27	寛政8年1月～8月欠損
5	寛政9年2月	御用状留記	寛政9年3月～12月	62	寛政9年1月～2月欠損
6	寛政10年正月	御用日記留帳	寛政10年1月～8月	58	} 寛政10年完揃
7	寛政10年8月	御用廻状写帳	寛政10年8月～12月	41	
8	寛政11年正月	御用状写	寛政11年1月～8月	49	} 寛政11年完揃
9	寛政11年9月	御用状写帳	寛政11年9月～寛政12年2月	32	
10	寛政12年2月	御用日記留帳	寛政12年2月～12月	64	} 寛政13=享和1年完揃
11	寛政13年正月	御用日記帳	寛政13年1月～6月	54	
12	享和1年8月	御用日記留帳	享和1年8月～12月	41	
13	享和2年正月	御用日記帳	享和2年1月～9月	78	享和2年10月～12月欠損
14	享和3年	亥之御用状留帳	享和3年1月～9月	99	享和3年10月～12月欠損
15	享和4年正月	子年御用留帳	享和4年1月～12月	132	文化2年欠損
16	文化3年正月	御用日記帳	文化3年1月～12月	163	
17	文化4年正月	御用日記帳	文化4年1月～12月	122	
18	延宝8年～文化4年	諸事御用留記巻	延宝8年12月～文化4年5月	52	

(注) 上記「御用留」18冊は『世田谷区史料叢書』第2巻（東京都世田谷区教育委員会、昭和62年）に収録されている。

とおりとなる。「御用日記」と「御用状留記」の二系統ともその内容は、いずれもいわゆる「御用留」と総称されるものである。

この一三年間、一八冊のうち、完揃しているものは、寛政七年・同一〇年・同一一年・同一二年・享和元年・同四年・文化三年・同四年の八年分であり、他の年は備考欄に注記したように欠損している。とくに文化二年の一年分はまるまる欠本となっており、残念である。

各年代ごとの一年間の収録項目数も寛政七年が一一九項目、同一〇年が九九項目、同一一年八一項目、享和元年九五項目、同四年が一二三項目、文化三年一六三項目、同四年が一二二項目となり年代が新しくなるにつれて収録項目数も若干増加傾向にあるといえよう。

さて、最後第一八冊目に収録したものは延宝八年（一六八〇）から文化四年（一八〇四）までの「諸事御用留記 巻」とあり、延宝八年・天和二年・貞享五年・元禄二年・享保二年・同七年・元文五年・寛保二年・延享二年・同三年・同四年・寛延二年・宝暦二年・明和元年・寛政三年・同六年・同九年・同一〇年・同一一年・享和三年・文化元・同四年に至る記事五二項目が収録されており貴重なものであるが、いわゆる「御用留」とは若干性格を異にし、「廻状」的性格のない村方から領主への願書の書留である。

さて、寛政七年から文化四年に至る期間が、丁度井伊家世田谷領代官としては大場弥十郎が荒井市郎兵衛と共に担当した時代の前半期であり、弥十郎農政が、これらの「御用留」の記事の中にも窺知されるのである。すなわち、弥十郎農政は寛政六年（一七九四）の就任から、代官職のまま死去した天保七年（一八三六）までの四二年間に及ぶが、それはさらに、寛政六年から文化一四年（一八一七）までの二三年間と文政元年（一八一八）から天保七年までの一八一年間に大別してみることができる。前半期は村落復興政策を基本に既成の諸制度を改廃し、農民諸負担の軽減、貧民

救済、潰株百姓の再興など多くの成果を収めた時期である。後半期は彦根藩財政の窮乏や幕府の文政改革などの影響をうけて地代官の機能が大幅に制約されたり、種々干渉をうけ、地代官と上級権力との葛藤が表面化した時期といえる。<sup>(12)</sup>

この期の「御用留」を検討することによって、弥十郎の農政の前半期の動向が、上野毛村という村落の中にどう投影されているかをみることができるといえる。また、彦根藩世田谷領二〇か村の一つである上野毛村の村落動向を弥十郎がどう把握し、彼の代官農政の展開に生かしたかという面からも興味深い課題を提示している。

弥十郎農政を上野毛村の動向と関連させて具体的に検証することが可能であろう。

ここでは、弥十郎が代官に就任した翌年の寛政七年の一年間の農民負担の実態を、この「御用留」の記載の中から窺ってみよう。

## (一) 「御用留」からみた農民夫役

寛政七年分は第2表にみるとおり、三冊に分冊されているが、一月から二月までの一年分が完揃している。

この一年分を月ごとに、御用の内容、日時・時期、出張場所、全体の動員数、上野毛村分の動員数、触元、宛先等に分類して表示したものが第3表である。

この第3表を基礎データとして、寛政七年の農民諸負担の動向を把握してみたい。

農民諸負担は大別して次の三系統になる。

- (一) 領主井伊家に対する諸負担、(二) 鷹場に関する負担、(三) 助郷の負担である。
- (一) の領主負担は、さらに①年貢、②物品の上納、③夫役負担となる。

(二)の鷹場負担は①夫役負担と②物品上納となる。

(三)の助郷は夫役負担のみとなる。

さて、(一)の領主負担のうち、①年貢は六月に夏成金、一二月に年貢米を上納することとなっている。②物品の上納は、季節行事に関するものであり、二月には餅草を一日二駄ずつ三日間江戸上屋敷へ上納し、四月末から五月初めには端午節句に使用する、よもぎ・しゃうふを上納し、六月には桃葉を一日一束半ずつ六日間、上・中屋敷に納めている。年の暮には正月準備の祝儀御用として豆木・かつの木・すぐりわら、お飭杭木などを上屋敷へ上納している。

(二)の鷹場負担での物品上納は、七月に蚊遣・杉之葉・同枝木等を馬喰町御郡代屋敷にある御鷹野役所へ納入している。八月に虻を上納し、上野毛村では一四〇疋を提出している。

さて、この「御用日記」の中心は、夫役負担の詳細な記載である。

次にこの夫役負担の動向をみることにしたい。

夫役負担は、①領主夫役、②鷹場夫役、③助郷夫役の三種類に大別できる。その夫役負担の回数、人足・馬の動員数を月別に表示したのが第4表である。

それによると、夫役負担回数四六回のうち三四回(七四%)は領主夫役であり、各六回(二三%)が鷹場と助郷夫役であり、圧倒的に領主夫役負担の比率の-highことが判明する。

月別にみると、二月が最高で一五回(三三%)、ついで三月が八回(一七%)となっている。十一月・十二月・一月の三か月間には夫役負担は全然なく、春に集中していることが注目される。これは農繁期や年貢納入月の夫役負担となるべく避けていることが窺えるが、それにしても二月・三月・四月の夫役負担の過重は農民生活を大きく圧迫していたことは後述のとおりである。上野毛村は人口一二〇人・家数二五軒・馬六疋という小村で、一か月間で五八人の

第3表 寛政7年「御用日記」にみる夫役一覧表

史料 番号	日 付	御用の内容	日時・期間	場 所	動員数	上野毛村分	触 元	宛 先
	(2月)							
5	1日	鹿狩御成御用につき	3日	世田谷大吉 寺	名主衆	名主	粕谷村 吉郎兵衛	鷹場組合村
6	5日	六郷領35ヶ村組合 用水路縁の竹木、伐 払		六郷用水 路、縁通			大貫次右衛 門手代 足立直五郎	
7	8日	中間奉公人の差出		御中屋敷 千駄谷	中間2人 中間2人		代官所	
8	11日	大饗院7回法事米増 人足	11~17日			人足8人		
9	13日	かま鉢々持参	14日	上目黒御用 屋敷		人足2人	吉郎兵衛	村々御名主 中
10	15日	駒場原御成に付騎馬 口附御用	16日	渋谷宮益町 名主 与右衛門方		人足4人 村才科1人	吉郎兵衛	村々御名主・ 年寄中
12	17日	明18日 御前様御 供御用人足、おもに かこ人足	17日夜4 ツ時迄	桜田御留所	人足42	人足5人	代官所	村々御名主・ 年寄中
13	18日	永井日向守御家中通 行	18日夜正 8ツ時	上高井土宿		人足2人 馬 1疋	上高井土宿 間屋役人 助惣惣代会 所役人	村々御名主 中
15	18日	宗門人別改帳帳代に つき出頭のこと	20日早朝	代官所	名主・年寄		代官所	村々名主・ 年寄中
16	20日	餅草	23・24・25・ 3日間	御上屋敷御 留所	1日2駄づ つ3日間	餅草2かこ	〃	村々名主・ 年寄中
17	20日	炭薪附馬	21~23日 3日間	八丁堀御屋 敷	1日20疋 づつ	馬4疋	〃	
19	21日	大節之御用ニ有之間	3月2日明 ヶ6時迄	世田谷大吉 寺前名主中 松戸迄相詰 候		人足2人 (代銭1人 700文)		
20	22日	御法事御用新附馬ニ 有之	23日朝6 ツ時迄	八丁堀御屋 敷	馬36疋	馬5疋	代官所	村々名主・ 年寄中
21	22日	御法事御用御道具持 人足、様もっこ持参	23日朝5 ツ時迄	桜田御留所	人足31人	人足5人	〃	〃
22	23日	御法事中寺詰人足、 寺詰名主、世田谷政 衛門、猪方村重八	24日4ツ 時迄	世田谷豪徳 寺		人足13人 (昼夜共 26人)	〃	〃
23	23日		24日朝6 ツ半時迄	桜田御隨方	62人	5人	〃	〃
24	23日		〃	御上屋敷留 所		馬3疋	〃	〃
25	24日	豪徳寺へ新附参り候 馬有之	25日朝5 ツ時迄	八丁堀御屋 敷		馬2疋	〃	〃

26	25日	御法事ニ付急御用青物附参り御用候	26日朝 5 ツ時迄	神田永富町 辻 小塩屋伝兵衛		馬 3 疋	代官所	村々名主・ 年寄中
27	26日	鹿符御用松戸詰人足敷料之儀御相談	27日朝 正 4ツ時	世田谷大吉 寺	名主中直々	名主	粕谷 吉郎兵衛	〃
28	29日	松戸ししかつき人足	3月2日夜 9ツ時	〃	名主銘々御 つれ立		〃	村々名主中
29	28日	御法事道具持返り人馬有之、并当持参	29日 昼 4 ツ時	豪徳寺参着		人足 5 人 馬 2 疋	代官所	〃
	[3月]							
30	1日	小金原御鹿符御用人足賃 5 貫文應す						
31	1日	鹿符御用人足	2日夜 4ツ 時 3日 昼 5 日夕	世田谷大吉 寺前松戸着			粕谷村吉郎 兵衛	村々名主中
1	12日	明 13 日守真院様千田ヶ谷出張御供御用人足駕人足	今夜中	桜田留所へ 相揃	人足 53 人 世話人共	人足 7 人	代官所	村々名主中
3	14日	鹿符御用松戸詰人足賃銭その他一件御用	16日朝 4 ツ時	廻り沢村東 寛院			粕谷村 吉郎兵衛	
4	15日	瀬田村々土砂利豪徳寺へ附馬有之	16日	瀬田村名主 方	馬 10 疋	馬 3 疋	代官所	村々名主中
5	17日	上岡断御用荷物附返ル馬有之	19日朝 4 ツ半	豪徳寺		馬 6 疋	〃	村々名主・ 年寄中
6	9 ~ 19日	千田谷垣結人足日々 15 人づつ指出		千田谷	人足 300 人	人足 22 人	〃	〃
7	18日	宗門人別改御奉行 2 名 24 日世田谷着	24日早朝	太場弥十郎 宅	名主	名主	〃	〃
8	21日	23日 晩 6 ツ時御姫様方羅漢寺、昼 5 浅草へ御出、御供人足	22日 正 8 ツ時	桜田留所	御 供 人 足 84 人	人足 4 人	〃	〃
9	23日	宗門改奉行衆并判突足輕共迎人馬	24日朝 6 ツ時	太場弥十郎 宅	人足 13 人、 馬 3 疋	人足 5 人 馬 1 疋	〃	〃
10	26日	28日 清蓮院様浅草辺御出御供御用人足、いづれもかこ人足	27日夕方	上屋敷留所	人足 50 人	人足 7 人 (脇差さし、髪月代 致)	〃	〃
11	29日	御城御道具持返し御用	30日朝 6 ツ半	太子堂村々 右衛門殿前 所		人足 4 人	吉郎兵衛	村々名主中
	[4月]							
12	4日	千田谷御中間令 1 人申出るよう示達					代官所	村々名主・ 年寄中
14	12日	池田山城守様御永や方他御荷物先触	13日 明 7 ツ時	(下高井土 か)		馬 2 疋	下高井土、 間下、九助、 相所役人	村々名主中
16	9日	小金原御鹿符御用人足賃銭割合につき					下野毛村 三左衛門	小山村 上野毛村

17	17日	19日朝6ツ時 御前様麻布一本松下屋敷御出御供人足、主にかこ人足	18日夕	桜田留所前	人足71人	人足6人	代官所	
18	17日	明18日、紀州様御家中方御通行の先触	今夜正8ツ時	（上高井土宿か）		人足2人 馬 1足	上高井土宿 間屋役人 助郷惣代金 所役人	村・名主中
19	17日	弁之助様端午御祝儀置御入用	19～20日	桜田留所納	御糍 量90束	同6束附1駄	代官所	名主・年寄中
20	20日	明21日奥女中大師河原江参詣、供人足かこ人足	今晚5ツ時	桜田留所	人足31人	人足5人	〃	〃
22	28日	よもきしゃうふ、端午御祝儀	5月1日	上町御役所	沢山		〃	〃
24	29日	御出ニ付御供御用人足、駕人足	今日中	御上屋敷留所		人足7人 髪月代致	〃	〃
	(5月)							
26	11日	明12日堀大和守様御献上御荷物等先触	明7ツ時	下高井戸宿		人足4人	下高井戸宿 間下 九右衛門、 相所役人	村・名主中
28	15日	明16日御前様、御姫様方千田谷下屋敷入御供人足	今日中	上屋敷留所	人足35人	人足5人	代官所	村・名主・ 年寄中
29	17日	去社・寅・卯三年分運上刈豆納入方履促					〃	〃
33	24日	明25日守真院様井御姫様共日黒御参詣御供人足	今日中	上屋敷留所	人足32人	人足4人 髪月代致 細帯無之、 内1人才料 脇指さし	〃	〃
	(6月)							
35	5日	千田谷御中間、岡本村殿兵衛に増給して決定					代官所	村・名主・ 年寄中
38	11日	明12日松平右見守様御家中方東叡山御荷物先触	あけ7ツ時	下高井土宿		人足2人	下高井土宿 八郎左衛門、惣代役人	村・名主中
39	3日	御用桃葉1日1束半つつ	4～9日	御上屋敷御中屋敷		桃葉1束半	代官所	村・名主・ 年寄中
41	23日	御年貢夏成金近々取立	7月1日 瀬田村より上郷→大場外十郎方 上野毛村より下郷→荒居市郎兵衛方				〃	〃
	(7月)							
42	4日	明5日明ヶ6時守真院様浅草辺へ御出、御供御用人足、かこ人足	今日夕方迄	桜田御留所		人足6人	代官所	村・名主・ 年寄中
44	6日	村・湯水ニ付、用水相下候様願書					北大森村、 高島村、八幡塚村	



45	8日	豪徳寺御廟所垣結人足、竹持参	10日早朝	豪徳寺			代官所	村々名主・年寄中
48	13日	御用桃葉不足につき差出のこと	14日	上屋敷中屋敷	桃葉31束半	桃葉1束半	"	"
	[8月]							
1	7月23日	蚊遣・杉之葉・同枝木御用	毎朝6ツ半時	馬喰町御郎代屋敷御寓野役所		杉之葉4抱同枝木1抱	粕谷村吉郎兵衛	村々名主中
2	8月6日	御参勤御用詰人足				人足5人	代官所	村々名主・年寄中
3	寛政5年7月	子安正親世音諸国順行開帳、人馬寄進			人足12人馬1疋		武州秩父郡横瀬村別当大慈寺	諸国御宿々御村々、御役人中
6	8月11日	東叡山荷物等御触	あけ7ツ時	下高井土宿		人足2人馬1疋	下高井土宿問屋左内、会所役人	村々御名主中
7	12日	"	"	"		馬2疋	下高井土宿問屋役人惣代助惣会所役人	"
9	11日	来ル24日例年之通り、御鷹場御法度証文	朝5ツ半時	駒場御用屋敷			吉郎兵衛	"
14	22日	蟻御用	8月晦日	瀬田村		蟻140疋	"	"
15	27日	明後29日朝5ツ時御供揃に而殿様豪徳寺へ参詣	28日朝5ツ時迄	上屋敷留所		馬3疋	代官所	村々名主・年寄中
16	27日	"、羽織袴ニ而罷出居可被申	朝5ツ時迄	豪徳寺裏門辺		名主・年寄	"	"
17	28日	当秋検見につき奉行衆来月3日頃出郷	9月2日まで	大場弥十郎方へ可被申出候			"	"
	[9月]							
19	3日	明4日検見奉行衆世田谷着被致		世田谷			代官所	村々名主・年寄中
20	8日	御巡見奉行衆、勘定人	今夜7ツ時	大場弥十郎方			"	"
21	12日	かま銘々持参	14日朝6ツ半時	上目黒、石川分水川開		人足3人	粕谷村吉郎兵衛	
22	20日	豪徳寺御修置に付、瀬田村も土取場手伝人馬	21日早朝	瀬田村	馬7疋	馬3疋	代官所	村々名主・年寄中
24	22日	炭薪附御用馬	9月23日~10月3日朝5ツ半時迄	八丁堀御屋敷	毎日馬10疋(110疋)	馬6疋(29日)	"	"
25	28日	豪徳寺御修置御用作事方手伝人足	29日朝5ツ時	豪徳寺(馬之麁は兩村共役同行)		人足6人馬1疋	"	"
	[10月]							

26	1日	豪徳寺御普請御用人足	2日朝5ツ時	豪徳寺		人足5人	代官所	村々名主・年寄中
27	2日	〃	3日朝5ツ時	馬は桜田土場方へ		人足5人 馬2疋	〃	〃
29	7日	今7日駒場原に御成、御道具持返し御用	8日朝6ツ半	代田村八郎右衛門殿		人足2人	粕谷村 吉郎兵衛	村々名主中
33	27日	明後29日御前様、豪徳寺参詣役馬	29日	豪徳寺	馬15疋	馬6疋	代官所	〃
	(12月)							
36	6日	年貢米	10日迄	八町堀御屋敷		米12俵		
37	6日	正月御祝儀物御用、豆木、すぐりわら、かつの木	8日	上町大場弥十郎宅へ納			代官所	
38	6日	御訪杭木	18日	御上屋敷へ納	瀬田村より(2本長さ2間2尺 岡本村より(3本長さ2間皮付			

(注) 上表の「史料番号」とは「世田谷区史料叢書」第2巻の編集の折りに編者が付けたものである。

第4表 寛政7年上野毛村の夫役負担回数(人足・馬)

内容 月	領主夫役	鷹場夫役	助郷夫役	合 計
1	回(人,疋)			
2	11(49,20)	3(7,0)	1(2,1)	15(58,21)
3	7(45,10)	1(4,0)		8(49,10)
4	3(18,0)		2(2,3)	5(20,3)
5	2(9,0)		1(4,0)	3(13,0)
6			1(2,0)	1(2,0)
7	2(6,0)			2(6,0)
8	3(10,3)		1(2,3)	4(12,6)
9	3(6,10)	1(3,0)		4(9,10)
10	3(10,8)	1(2,0)		4(12,8)
11				
12				
合計	34(153,51)	6(16,0)	6(12,7)	46(181,58)

人足と二一疋の夫役を徴発されることがどんなに困難なことであるかは、動員を命じる代官の触書の中に「此節農業間々敷頃迷惑ニも有之候得とも」という農民たちに同情を示す一節が挿入されていることでも判明する。

以下領主夫役・鷹場夫役・助郷夫役についてその実態を検討してみよう。

〔領主夫役〕

彦根藩井伊家に対する領主夫役は、①殿様・姫様等の供人足、②井伊家の菩提寺である豪徳寺等の法事関係の夫役、

③江戸屋敷の薪炭運搬の夫役、垣結人足、④宗門改役人・巡見奉行の送迎夫役等である。

①殿様・姫様等の供人足の事例として、寛政七年二月一七日の記事をみると、翌一八日の御前様の「御出」の「御供御用人足」として、世田谷領の井伊家二〇か村から四二人の供人足を徴発され、一七日夜四ツ時（午後二〇時）までに、上屋敷桜田御留所へ集合するよう命ぜられている。この供人足の役割は「かこ人足」であり、そのため老人・子供を除き「達者成もの」を差出すよういわれている。また、髪はさかやき致し、脇差をさしてでてくるよう注文をつけられている。上野毛村では、人足五人を出している。

姫様御供の事例として、同年三月二一日の記事をみると、明後二三日朝六ツ時（午前六時）に「御姫様方」が羅漢寺へ参詣し、昼より浅草へ「御出」になるので「御供人足」として世田谷領から八四人の人足が徴発されている。そこで二二日正八ツ時（午後二時）頃に桜田留所へ集合するよう命ぜられている。勿論老人・子供を除き、働き盛りの「達者」の者を要求されており、身支度も厳重で、細帯を使用してはならず、長髪・乱鬢の者は髪月代させるとしている。前日の午後二時集合というのは、身なりや頭髮などの点検、月代などさせるために時間をとっていることが判明する。また人足たちは脇さしを帯してくることも条件となっている。世話人や名主も同様二二日午後二時に集合することになっている。日頃田畑で泥にまみれている農民たちも供人足の折には、月代を整え、身支度も清潔にし、脇

差を帯して江戸市中を練り歩くのである。村と江戸との、もう一つの結びつきが指摘できるのではなからうか。

②豪徳寺や法事関係の夫役の事例としては二月一日の記事に「大魏院様御七回御法事」のための「米拵人足」を一日から一七日までの七日間詰人足として徴発され、上野毛村では「米つき人足八人」を割当てられているのである。二月二三日の項には、「御法事御用」として、薪附馬三六疋を要求され、明二三日朝六ツ時（午前六時）迄に八町堀御屋敷へ集合するよう命ぜられ、八町堀の中屋敷から世田谷豪徳寺まで、法事に必要とする薪を運搬するのである。この二三日の項目には、「御法事御用御道具持人足」として三一人が翌二三日朝五ツ時（午前八時）迄に桜田御留所へ集合するよう命ぜられ、「棒もつこ持参申付」られている。上野毛村では五人を人足として出している。翌二三日の記事では、明二四日の豪徳寺での法事中は「寺詰人足」として、四ツ時（午前一〇時）までに豪徳寺に集合し、これは「昼夜勤」として、上野毛村では人足として一三人、昼夜共で合計二六人となり、これは、二五軒しかない同村では、全村あげて戸主たちは、詰めることとなる。さらに同日の記事には、明二四日朝六ツ半時（午前七時）迄に桜田御膳方へ六二人の人足が到着するよう命ぜられており、上野毛村では五人が割当てられた。このほか同時刻に馬も御上屋敷留所へ集められ、同村からは三疋が命ぜられている。二四日には、朝五ツ時（午前八時）迄に八丁堀御屋敷へ集合し、豪徳寺へ薪を運搬する馬の提供を要求され、上野毛村では二疋を割当てられた。二五日には「御法事ニ付急御用青物」の運搬のため、翌二六日朝五ツ時迄、神田永富町辻の小塩屋伝兵衛方へ行って野菜類を運送するよう命ぜられ、上野毛村では三疋を提供させられている。二八日には「御法事」終了により引払いのため、「御道具持返り人馬」を徴発され、明二九日昼四ツ時（午前一〇時）に豪徳寺へ集合を命ぜられ、各自并当持参、脇差しを帶し動員されている。この時の全体の動員の人足・馬数は記載されているが、上野毛村では人足五人・馬二疋を徴発されたのである。

以上、大魏院の七回法事に関する人馬夫役の負担状況であるが、二月一日の米捧人足から始まって、同月二十九日の道具の返送まで前後一九日間で動員された人馬は莫大なものであった。村高五五石の上野毛村一か村分だけでも、人足四四人・馬二〇疋を徴発されているのだから井伊家世田谷領二〇か村の総石高三三〇〇石は上野毛村五五石の四二倍となり、単純に計算しても、人足一八四八人、馬八四〇疋となり、二〇か村合計の家数一一八八軒、馬二三四疋（文化五年）の規模を大きく上まわるものであることがわかる。

③ 江戸屋敷の垣結人足、薪炭運搬等の事例では、三月九日の記事に、下屋敷千田谷垣結人足が「日々拾五人ツ」三〇〇人動員され、上野毛村からも二三人徴発されている。炭薪運搬の「御用馬」は九月二三日より一〇月三日まで、毎日馬一〇疋ずつ、合計一一〇疋、朝五ツ半（午前九時）までに八丁堀御屋敷へ提供させられている。これは冬期の準備であらう。上野毛村からは六疋を徴発されている。

④ 宗門改役人・巡見奉行の送迎夫役等の事例としては、三月二三日の記事に「此度宗門改奉行衆并判突足輕共迎人馬」として、人足一三人・馬三疋を二四日朝六ツ時（午前六時）までに代官大場弥十郎宅へ集合するように命じている。上野毛村では、人足五人・馬一疋を割当てられている。なお、寛政七年の「御用日記」には巡見の事例の記載はない。以上、これら井伊家関係の夫役負担の一切を掌握し、その手配・触当等を実施したのが世田谷代官である。年間六、七千人の人足を采配した代官大場弥十郎は、自らを「人足廻し、日雇頭に等敷」と述べている。<sup>13</sup>この膨大な人足夫役に対しては一文の手当も支給されず、無賃の使役であったが、代官弥十郎は、人足たちに対し、賃銀の給付を藩に執拗に要求し、これをかちとるのであった。<sup>14</sup>

#### 〔鷹場夫役〕

鷹場夫役負担は第4表にみるとおり、寛政七年では六回であり、人足のみの動員で馬の徴発を伴っていないこと

が注目される。

この鷹場に関する触書は鷹場組合村の触次粕谷村吉郎兵衛から廻達されるものである。

二月一三日には、明一四日明ヶ六つ時（午前六時）に上目黒御用屋敷へ、鎌を銘々持参して集合するよう触書が出され、上野毛村では人足二人を出している。これは一六日に駒場原に將軍家齊の「御成」があるため、御鷹場の整備のための動員である。一五日には、「騎馬口附御用」の人足動員が示達され、「今昼七時半時（午後五時）雨天共渋谷宮益町名主与右衛門殿」へ詰るよう示達されている。上野毛村では人足四人、村才料一人を出している。また同日の世田谷代官所の触書には「明十六日公方様」が駒場原へ「御成」になるので、村々の人馬共、江戸やその近辺へ出してはならないと命じている。

寛政七年には一〇月七日にも將軍の駒場原「御成」の記事があり、九月一二日には鎌持参の動員がかけられ、春二月と同じパターンである。春秋に將軍の鷹狩があったことがわかる。

#### 〔助郷夫役〕

井伊家世田谷領諸村の助郷は甲州街道の上高井戸宿・下高井戸宿である。寛政七年の助郷夫役は第4表のとおり六回で、上野毛村では人足一二人・馬七疋を徴発されている。

この助郷の触元は上高井戸宿では問屋役人と助郷惣代会所役人の連名であり、下高井戸宿では問下と相所役人の連名となっている。

二月一八日の記事によると、上高井戸宿問屋役人と助郷惣代会所役人の連名で、「明十九日永井日向守様御家中方御通行其外御触有之」として、今夜正八ツ時刻（午前二時）に人馬共集合するよう示達している。上野毛村では人足二人・馬一疋を徴発されている。

助郷の場合は、触当の示達のあった日に、人馬の徴発が行なわれており緊急を要したことが判明する。

以上、寛政七年「御用日記」からみた夫役負担を整理し、その一端を紹介したものであるが、農民たちが、農業経営のかたわら、このように多様な夫役負担を負っていたことは、農民生活をどれほど圧迫したものになっていたか、想像を絶するものであろう。これら夫役徴発の多くが、早朝に現地集合となっており、農民たちは夜中から出勤していたことになる。

年貢負担の解明と共に、これら日常的に存在していた夫役負担の実態を解明し、農民生活をトータルに把握することが必要であるといえよう。

### (三) 「御用留」の記載内容

ここでは、寛政七年から文化四年までの「御用留」の記載の中から夫役以外で注目すべき事項を簡単に紹介してみたい。

一〇三 寛政七年「御用日記」には、中屋敷・下屋敷共中間が各二名、「御暇」となったので、合計四名の欠員を補充するので希望者があれば各村で「吟味」し、差出すよう代官所からの示達が出されている。しかし、これはなかなか補充できず、四月四日の代官所の廻状では、下屋敷（千田谷）の中間が、一人分が補充できないので、どうしても人が得られない場合は「村々割附<sub>ニ</sub>成ともいたし差出候事<sub>ニ</sub>候」としている。結局六月五日の代官所の達書によると、「岡本村源兵衛と申者当六月々来三月迄金沓<sub>ニ</sub>両式分<sub>ニ</sub>之増し金<sub>ニ</sub>而罷出候様<sub>ニ</sub>取究候」とあり、給金の増額によって、やっと決定したことがわかる。しかし、この増額分は領内村々の負担となっているのである。当時武家奉公人は賃銀が安い上に何かと窮屈で、なり手がなかった。松平定信の寛政改革の旧里帰農令の中でも故郷に帰るか、江戸に

とどまるなら武家奉公人となるよう勸奨したが、両方共成功しなかった。<sup>15)</sup>

六月二三日の「寛」には、世田谷領内の夏成年貢金の徴収方法として、瀬田村より上郷は大場弥十郎方へ提出し、上野毛村より下郷は荒居市郎兵衛方へ提出するよう指示している。これは当時世田谷領代官は大場・荒居の兩人で分担していたので年貢金の徴収も、このように分担したものである。

八月八日の項には上野毛村名主兵蔵の家作願が絵図面つきで鳥見役人後藤与次右衛門宛に提出されている。これによると兵蔵の兄丹治は病身で百姓農業もできないので農間渡世で生計をたてるため、兵蔵の屋敷内に長三間・横二間の六坪の家作を出願している。商売としては、塩・油・酢・醬油・紙・墨・筆・草履・糸針類・葉多葉粉・菓子類をとり扱いたいとしている。これは許可されたのである。

五 寛政九年「御用状留帳」には代官大場弥十郎に関する記事が二か所ある。一つは三月二日弥十郎実家の伯父が二一日に病死したことであり、一月二六日には弥十郎が再婚したことである。「大場弥十郎縁女引取、右ニ付村々々祝儀、添書大場弥十郎御後妻御引取之由、御祝儀」とある。

六 寛政一〇年「御用日記留帳」の二月一九日には、去々辰二月から去巳十一月までの「出勤御用人馬調帳」差出の廻状が大場弥十郎によって出されている。これは寛政八年二月から同九年十一月までの一年間の御用人馬を調査したものである。これは御用人馬負担の実態を把握し、負担農民への賃銀支給を藩に要請するための準備であった。

七 寛政一〇年「御用廻状写帳」の一二月一五日の項には「豪徳寺祠堂金拾々年賦元金済崩シ返上之程候間利息金支給返納の事」とある。これは弥十郎が農民負担の軽減化ということで最初に取り組んだものであり、豪徳寺祠堂金の利息二三兩三分余は、毎年年貢同様に上納されている状況を改め、無利息一〇年賦で元金二三五兩の上納で打ち切りとしたものである。これを実現するためには三年間四度に及ぶ歎願が必要であった。<sup>16)</sup>



八 寛政一一年「御用状写」には、上野毛村名主田中兵藏の親類書が記載されており、この宛先が戸沢上総佐様御姫様御殿御役人中様となっている。何のために提出されたものか、その理由は不明だが、有力名主田中家の親類が判明し、興味深い。

一〇 寛政一二年「御用日記留帳」には、「今度従公儀五海道筋分間絵図認メ被仰出」されるとして支配勘定と御普請役が廻村してくるので、それまでに「海道筋駅場間之村共御朱印地・除地・年貢地之寺々宗旨派分ケ、国郡村本寺・末寺等塔司迄書出可申」とある。

一一 寛政一三年「御用日記」には一月七日大場弥十郎が「心願有之」として、伊勢・春日・八幡三社への参宮願が許可され、九〇日間の「御暇」をもらい、この七日に出立した。この間の「御用向」は荒居一郎兵衛一人にて担当となっている。

四月一五日には、雹降のため、麦作・田方見分を出願し、一七日には雹損の被害状況が書き出され、五月二二日には「雹荒麦畑反歩小前帳」の提出を求められている。

一二 享和元年「御用日記帳」には九月一日に百姓家作建継ならびに新規物置・既の類に關して、六坪迄は「添翰」の必要はないとしている。六坪以上は「添翰」をもって出願するよう鷹場触次役の粕谷村吉郎兵衛から示達されている。

同九月上野毛村百姓甚兵衛等七人が夫食願いで村役人の「差留」をも聞き入れず、御屋敷様迄「越訴」し、「不届至極」付、此度御咎被仰付」られ、「御愼罷在候」とあり、「御咎」御免の歎願書が上野毛村名主兵藏、下野毛村名主三左衛門、瀬田村名主四郎右衛門の連印で提出されている。九月二七日には越訴御咎七人の者は代官所へ「召連」れるようにとの達方が出されている。

一三 享和二年「御用日記帳」には三月上野毛村百姓孫右衛門母七二歳が孤独困窮であり、このままでは「餓死可仕」として生涯の御救米支給を願っている。これに対して日数六〇日間、一日米二合の支給が認められた。

同三月の記載の中には、「近年打統諸作共凶作仕、依之自然と村方困窮仕、取統之義難渡至極仕候」として、「当夏麦作收納仕候時節迄夫食被下遣、御百姓共露命御救被下置候様」歎願している。

同四月には、孫右衛門母に生涯御救の再願書を提出している。これにより五月上旬より九月下旬迄、一か月米六升宛の御救米が支給されたが、九月には、さらに一〇月以降も継続して、「生涯之露命御救」を歎願している。

代官大場弥十郎は寛政十一年（一七九八）から貧民救済仕法のひとつとして、生涯給付される「御助救米」を藩に要請し、実現化を計っているが、その内実はなかなか厳格であったことが、この一事例でもわかる。

一四 享和三年「亥之御用状留帳」には一月二七日の記事として、近頃江戸表では出火が多く「騒々敷候」として、世田谷領村々は「御屋舗欠附人足」として前々よりとりきめてあるが、今回改めて「申達候」として次のように述べている。桜田屋敷（上屋敷）・喰違屋敷（中屋敷）・八丁堀屋敷（下屋敷）などの近辺で出火の折には、「風並・吉凶」に拘らず人足を差出すよう命令している。途中で鎮火したからといって無断で帰村せず、必ず桜田御留所役所へ出張し、村名・出人足高を届け、帰村の許可を得るよう申渡されている。

江戸周辺に配置された井伊家世田谷領村々の役割の一つとして、江戸屋敷の不測の事態に対応することが要請されていたのである。第三節でもすでに述べたが、天保改革の上知令で世田谷領村々が上知の対象となったことに井伊家が反対した理由に、世田谷領の「駈附人足」としての役割をあげている。

一月二九日には「昨今大蔵村不慮之義出来仕候」とあり「御見舞旁」大蔵村市右衛門殿宅へ参集するよう鎌田村名主源右衛門・宇奈根村名主嘉蔵から村々名主中へ廻状が出されている。翌三〇日には「此度大蔵村之もの共越訴いた

し御咎メ被仰付候」とあり、「不慮之儀」が「越訴」事件であることが判明する。越訴の罪で捕えられた者の番人足が徴発され、同日上野毛村では五人、閏一月一〇日には一〇人が割り当てられた。

二月三日には上野毛村庄藏母が御屋敷様へ「御門訴」し、「不届<sub>ニ</sub>付座敷押込」になったという届書が記されている。

この時期、世田谷領村々の農民は、直接江戸の井伊家屋敷へ「越訴」や「門訴」を繰返しているのである。代官大場弥十郎の農政はこのような村方の動向を背景に展開したものであることがわかる。

一五 享和四年「子年御留帳」には、四月二四日（同年二月に文化元年と改元している）の項に、代官大場弥十郎の潰百姓対策としてのその仕法が記されている。すなわち、潰株となった者の田畑屋敷は親類や組合が責任をもって管理し、その田畑は小作地として貸与し、その小作料を積立金として帳面にも記録し、毎年村役人が点検し厳重保管する。積立額がある程度蓄積できたら、村内や近隣の次三男で別家を希望するものに、積立金・居屋敷・田畑などを与えて潰株を相続させるという方法である。この潰株再興政策は成功し、弥十郎の在職中で再興した潰株の家数は七六軒に達したという。<sup>17)</sup>

五月九日には代官大場弥十郎の養父六兵衛が死去した通知が記載されている。

一六 文化三年「御用日記帳」には二月九日「公儀触書」として、江戸近在より「白米」を出荷し、それを問屋でもない「素人」が引請、売買していることに警告を発し、「当時米直段格別下直<sub>ニ</sub>有之、相場之障<sub>ニ</sub>も相成候間」として、すべて「白米」の江戸との取引きは「素人」はいうまでもなく、問屋でも「一切引受申間敷候」と命じている。米価暴落で武士階級が困窮したためにとられた対策である。

同年九月には同じく「公儀御触書之写」として、「近年米価下直<sub>ニ</sub>而世上一同難義<sub>ニ</sub>」しているとして市場に出廻って

いる米を酒造に注ぎ込んだり、囲粉にするよう命じている。

二月一六日には、岡本村新右衛門・梅吉の二人が「御不審成儀有之候間、手鎖之上村預申渡候」とあり、各村は番人足が割り当てられ、各人一人につき一〇人ずつ昼夜共の番人であり、常時二〇人の番人がはりつけられるというもののしきである。また六月二日には同じ岡本村百姓市右衛門妻子共四人が「村預ケ」となり、これまた番人足、「昼夜二人ツム村々も可被差出候」とある。この年岡本村では事件が発生しているようだが、これ以上具体的なことは未詳である。

六月一日には、「むかし近年迄ニおいて村方百姓之内公儀にめしとられ候上、家財・地面闕所等ニ成候義有之候ハ、咎之輕重ニかわらず覺留等ニ而もこれあらハ、来ル五日迄ニ荒居一郎兵衛方へ書付届ケ可申出候」という触書が代官所から村々名主中に出されている。これは領内における過去の召捕、処罰の事例を点検整理しようとしたものであり、この当時の不安・不穏な状況の反映ともいえよう。

一七 文化四年「御用日記帳」には、四月二二日代官大場弥十郎が後妻を迎えたので、祝儀出席方の廻状が用賀村名主榮治郎から村々名主中に出されている。

一八 延宝八年〜文化四年「諸事御用留記 卷」には、近世前期の上野毛村の動向がわかり貴重なものであるが、前述したように、いわゆる「御用留」とは趣を異にする。延宝八年（一六八〇）二月三日付で「当年兩度之大風故万事作物共違申候」として年貢納入ができず、さらに「当分夫食無之」状態であることを惣百姓連印で同村名主源兵衛に訴えたものである。ついに同年二月二八日には、米五俵、永三兩それに各口米・口銭共未進となり、来年七月一日までの延納願いを同村源兵衛・新右衛門・孫兵衛・三右衛門の連印と証人大場市左衛門が名前を連ねて閑野源左衛門他二名宛に提出している。同月には年貢未進のための売立の家財等の預り手形が記載されている。

寛保二年（二七四〇）四月一〇日には上野毛村から東慶寺駄込み女子の縁切り証文が転載されている。

文化元年（二八〇四）九月には「御屋敷様御用人馬減方歎願書」が提出され、その一節に、「去亥年（享和三年）申付諸人足<sub>三</sub>而老万人余<sub>三</sub>も相成御百姓共甚相歎申候」とある。この歎願書は巡見奉行に提出するものである。さらに同年二月にも「御屋敷様御用人馬減免願書」が世田谷御内村々名主・年寄・百姓代の惣連印で代官所宛に提出されている。

同二年閏八月には「御屋敷御用人馬夏秋六か月間御免願書」が出され、翌三年九月にも同様な「夏秋六ヶ月間御免願書」が再提出されている。

文化三年九月一二日の項には、享和元年（二八〇二）の巡見奉行大鳥居左吉・広瀬茂兵衛らが出役として来村した折に夫食要求の「御駕籠訴」した者の経過を詳細に延べている。

文化四年正月には「御用人馬減方、各人番人御免願書」が出され、これら夫役負担の軽減運動がねばり強く展開している状況が判明する。さらに前年九月・同年九月の二度にわたり、これら御用人馬や諸入用銭の負担をこれまでの反別割から、石高割に変更して貰いたい旨の歎願を提出している。

文化四年五月には、御鷹野御用触次柏谷村吉郎兵衛が退役を機会に、鷹場組合村を二組に分割して、一〇か村は赤堤村名主栄蔵を触次とし、残りの井伊領を中心とした二三ヶ村は猪方村名主重八を触次として任命してほしい旨の願書を出している。その理由として、三三か村一組では広域すぎて触書の伝達に敏速を欠くとしている。果たしてこの出願が承認されたかどうかは未確認だが、触次の交代を機会に組合村の編成が問題とされるのは、第三節の明和二年二月十一日の事例と同じである。

## 五 文化四年～文政四年「御用留」の検討

### (一) 「御用留」の存在状況

本節では文化四年（一八〇七）から文政三年（一八二〇）までの一四年間の「御用留」一二冊を検討対象としたい。さて、この一二冊の「御用留」の表題年月、表題、収載年月、収録項目数を一覧表にしたものが、第5表である。さて、この一二冊のいわゆる「御用留」はその表題が多様であることは、第三節・第四節の場合と同様である。

「御用留」の内容としては、一文化四年～文政三年「諸事御用留記 貳」と他の二～一二の「御用日記留」あるいは「御用状留記」とは大きく相違している。すなわち、一は第四節の一八延宝八年～文化四年「諸事御用留記 壹」の系統であり、村方からの出願事項を書留めたものである。すなわち、御用人馬の軽減願、久離願、盗難届、村方騒動につき歎願書等である。これに対して、二～一二までの「御用日記留」あるいは「御用状留記」は領主からの労働夫役の徴発や諸物資の収取状況を詳細に明記したものである。

この二～一二までの「御用日記留」「御用状留記」の記載内容を一月から十二月までの月別にその項目数を一覧で表示すると、第6表のとおりである。

これによると、労働夫役や物資徴発の多い月は、二月・三月・四月と八月・九月・一〇月、すなわち春と秋に集中し、比較的少ない月は、一月と六月・七月・十一月であることが判明する。一月は正月であり、六・七・一一の各月は農繁期であり、当然といえよう。

ここでは、「御用留」の記載内容を「御用人馬」を中心とした労働夫役の収奪状況と農民の歎願運動からみること

第5表 文化4年～文政3年上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表題	収載年月	収録項目数	備考
1	文化4年～文政3年	諸事御用留記式	文化4年8月～文政3年9月	89	
2	文化5年正月	御用日記留	文化5年正月～12月	111	
3	文化6年正月	御用状日記留	文化6年正月～12月	109	
4	文化7年正月	御用留記	文化7年正月～12月	98	文化6年12月分2項目含む
5	文化8年正月	御用日記	文化8年正月～12月	74	文化7年12月分2項目含む
6	文化9年正月	御用日記	文化9年正月～12月	92	
7	文化10年正月	御用状御触記帳	文化10年正月～12月	90	文化9年9月・11月分各1項目含む
8	文化11年正月	御用状留記	文化11年正月～12月	79	
9	文化13年正月	御用状留記	文化13年正月～12月	91	文化12年11月分1項目含む
10	文化14年正月	御用状留記	文化14年正月～12月	81	文化13年12月分2項目含む
11	文化15年正月	御用状留記	文化15年正月～12月	75	
12	文政3年正月	御用状留記	文政3年2月～12月	84	文政2年12月分1項目含む

史料館研究紀要 第一九号

(注) 上記「御用留」12冊は『世田谷区史料叢書』第3巻(東京都世田谷区教育委員会、昭和63年)に収録されている。

第6表 文化5年～文政3年上野毛村「御用留」の月別項目数の動向

番号	年号	表題	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2	文化5年	御用日記留	4	13	9	6	5	★14	7	14	9	10	10	10
3	文化6年	御用状日記留	10	16	11	4	9	2	15	7	4	12	6	11
4	文化7年	御用留記	7	16	6	11	9	8	4	4	12	9	2	9
5	文化8年	御用日記	5	★15	6	8	3	1	9	7	4	6	1	5
6	文化9年	御用日記	6	12	10	9	10	3	2	7	9	7	6	6
7	文化10年	御用状御触記帳	6	3	13	4	6	8	7	7	12	11	★7	3
8	文化11年	御用状留記	4	8	11	5	2	2	2	9	9	11	6	6
9	文化13年	御用状留記	5	16	13	9	6	3	6	★12	8	4	3	6
10	文化14年	御用状留記	2	14	4	5	4	2	10	11	5	9	4	10
11	文化15年	御用状留記	5	3	12	10	8	4	2	3	10	5	3	7
12	文政3年	御用状留記	0	4	9	6	17	5	3	6	7	12	6	8
合 計			54	120	104	77	79	52	67	87	89	96	54	81
一か月平均			4.9	10.9	9.4	7.0	7.1	4.7	6.1	7.9	8.1	8.7	4.9	7.3

(注) ★印は閏月を含む。

としよう。

(二) 農民夫役の激増と歎願運動

文化五年から文政三年までの「御用留」からみた夫役負担の動向を表示すると第7表のようになる。

これによると、夫役の種類は、大別して四種類となる。すなわち、領主としての大名井伊家関係、將軍御鷹場関係、甲州道中の上・下高井戸宿の助郷関係、それに玉川から引水した六郷用水関係である。

このうち、井伊家関係の夫役が全体の九〇%を占めている。井伊家関係の夫役の内訳は、供人足、井伊家江戸屋敷菩提寺豪徳寺（世田谷村）、桜田・赤坂喰違・千田谷の各江戸屋敷、それに宗門改等の役人の出張、その他の五項目に分類してみることができ。この五項目の中でも、豪徳寺夫役と供人足の夫役が、それぞれ全体の三分の一以上を占め、両者を合計すると、七四%という高率となる。

豪徳寺関係の夫役には、豪徳寺における法事・参

「御用留」の性格と内容（一）（森）

第7表 文化5年～文政3年上野毛村「御用留」からみた夫役負担の動向

内容 年代	領主井伊家関係					鷹場	助郷	用水他	合計
	供人足	豪徳寺	江戸屋敷	宗門改役人 巡見奉行	駈付人足等				
文化5年	15	40	7	1	1	3	3		70
文化6年	22	30	10	1	1	3		1	68
文化7年	24	12	12			3	1	1	53
文化8年	9	12	7			3			31
文化9年	20	18	5			3	10		56
文化10年	14	14	8	1	1	3	2		43
文化11年	20	17	4			3	3		47
文化13年	10	24	6			3		1	44
文化14年	13	12	3		2	1			31
文化15年	19	10	5		3	2			39
文政3年	17	7	4			3			31
合計	183 (35.6)	196 (38.2)	71 (13.8)	3 (0.5)	8 (1.5)	30 (5.8)	19 (3.7)	3 (0.5)	513 (100.0)

(注) 合計欄の( )は%を示す。



詣の折の荷物の運搬はいうまでもなく、修覆の手伝い人足として大量の農民が動員されたのである。例えば、作事大工手伝人足、畳刺手伝人足、瓦方手伝人足、左官手伝人足等であり、普段でも掃除人足・垣結人足が課せられているのである。

供人足は殿様・奥方・若殿・姫君等の神社仏閣への参詣の折など、領民が大量動員されるのである。

江戸屋敷の夫役では、桜田屋敷に米つき人足、八丁堀から上屋敷まで河岸揚運搬の人馬提供、薪付馬の差出、千田谷屋敷の萱刈人足、垣結人足、下糞付馬の差出等がある。

その他の人足としては、火事や緊急の場合の駆付人足の動員があった。文化一四年の記載によると梶町辺の出火につき桜田上屋敷への類焼が危惧され、世田谷領農民に対して駆付人足の要請がなされている。

このような人馬徴発が日常的な農業経営を圧迫し、労働力不足による田畑の荒廃を生み出し、没落農民を激増させ世田谷領農村の危機を招来していたのである。

一文化四年（文政三年）「諸事御用留記 貳」には、その動向について多くの史料が収録されている。

第8表は、井伊家世田谷領二〇か村の人馬動員数である。これによると、急増した時期は寛政二年（二七九〇）の人足八三九四人、馬一四一三疋であり、このうち三七三八人が豪徳寺修覆御用に動員されているものである。文化二年（一八〇五）には人足一万〇四三七人・馬九八二疋、さらに同六年（一八〇九）には一万五六八〇人・九六三疋と驚異的な数字となっている。

このような人馬徴発の激増に対し、村方では、その軽減・免除・廃止方を必至に歎願しているのである。

文化六年一〇月には、近年御供御用人足が急増し、その他にも不時の御用人馬詰人足として、千田谷・豪徳寺の御用が夥敷あり、さらに江戸近在ということもあって、將軍家の「御成御用・御鷹御用人馬」、甲州道中高井戸宿助卿

負担などが重なり、農業が手後れとなり、諸作の収納や蒔付に難渋していることを訴えている。またこの人馬夫役は領内の百姓だけでは対応できず、他領の農民を一日一人二〇〇文、馬一疋四〇〇文を支払って雇入れ、処理しているありさまである。また領内の農民でも人馬徴発で出張する場合は平人足一人につき一七二文、平馬一疋につき三五〇文を支給している。それらの費用は、持高割で全村の農民が拠出しているのである。この上に年貢・諸役負担があり、到底「御百姓」相続が維持できないので、御用人馬の手当として、一人につき米一升五合、馬一疋につき三升宛の「御扶持米」を支給して貰いたいと歎願した。しかし、この歎願に対しては、何の回答も領主側から得られなかった。そこで一年後の文化七年九月はば同一文面で再度の歎願を試みた。

これに対し世田谷領代官大場弥十郎は農民側に示唆を与え、問題は「扶持米」の支給によっては解決しないとし、御用人馬を軽減させることこそ必要だと説いている。日雇賃金を支給されれば、田畑が荒廃しても「御用」を勤めるのか、と農民に問うている。そこで農民たちも、軽減方の歎願を同月に改めて提出した。弥十郎は代官所の諸記録からこれまでの御用人馬の動員数を農民側に教示し、その膨大なる数字を歎願書に記入させている（第8表の数字が、それに該当する）。

第8表 井伊家世田谷領人馬動員数

年 代	人 足	馬	内、豪徳寺修 覆御用人数
宝永6年	715人	280疋	
正徳3年	782	420	
享保3年	32	473	
寛保1年	1,394	350	
明和5年	1,663	328	
寛政2年	8,394	1,413	3,738人
文化2年	10,437	982	865
文化6年	15,680	963	903

この一年間に一万五千人を超える人足動員が「御百姓」経営を破壊させているとし、一か年の御用人馬を平均二五〇〇人限りとしてほしいと訴えた。

この再三の要求を無視できず領主側は文化一〇年（一八一三）七月「御差紙御免許之写」で人足一件につき一人二日間の単位で米一升八合を支給すると回答した。

しかしここでは人馬の数の制限要求については無視している。

文化一二年（一八一五）二月には領内農民は豪徳寺御法事・御修復御用人馬の「御免願書」を提出している。ここで農民たちは、「御百姓」の成り立か、豪徳寺の夫役かという両者の矛盾を二者択一の形で問題を提起し、「御百姓」維持のために豪徳寺夫役の全面的免除を強行に主張したのである。

しかし、これが簡単に受け入れられなかったことはいうまでもない。文化一三年以降の「御用状留記」には相変わらず豪徳寺御用人馬の徴発記事が掲載されている。しかし、井伊家菩提所としての豪徳寺の夫役は軽減させることができなかったが、文政三年（一八二〇）には井伊家下屋敷千田谷の茅刈人足はこれまで年間五〇〇人ずつであったのが三〇〇人となり、二〇〇人の削減を獲得し、やはり同年千田谷屋敷の垣繕人足三〇〇人から一七〇人と一三〇人の軽減をかついたのである。<sup>18)</sup>

以上、御用人馬の徴発と農民側の軽減運動の一端を紹介したが、井伊家世田谷領二〇か村の農民が江戸の井伊家屋敷や世田谷村に存在した井伊家菩提寺豪徳寺の諸負担にいかにか呻吟していたかということが、これらの「御用留」の記事によって窺うことができるのである。

（未完）

〔注〕

- (1) 大塚史学会編『新版郷土史辞典』二一四頁(朝倉書店、昭和四四年)
- (2) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第六卷五〇頁(吉川弘文館、昭和六〇年)
- (3) 「天保期の御用留」(一)「萩園村・天保五年」(『茅ヶ崎市史研究』第四号四七頁、昭和五五年)
- (4) 「須田家文書」(『埼玉県史資料所在目録』第一集一六八～一七一頁、埼玉県史編さん室、昭和五五年)
- (5) 「山口家文書」(『史料館所蔵史料目録』第七集四七～四八頁、史料館、昭和三三年)
- (6) 「吉野家文書」(「御廻状留帳」『青梅市史史料集』第二九号～三一号所収、青梅市教育委員会、昭和五六年～同五年)
- (7) 「平川家文書」(『大田区史(資料編)平川家文書一』一～九〇八頁、東京都大田区、昭和五〇年)
- (8) 田中重義氏(東京都世田谷区上野毛三丁目四番九号)の所蔵で、この文書については、すでに『旧荏原郡上野毛村名主田中家文書目録』(東京都世田谷区教育委員会、昭和五七年)が公刊されている。
- (9) 現在上野毛村「御用留」は、『世田谷区史料叢書』(以下「叢書」と略す)として刊行されており、ここでいう第一期が「叢書」第一巻(世田谷区教育委員会、昭和六〇年)、

「御用留」の性格と内容(一)(森)

第二期が『叢書』第二巻(同、昭和六二年)、第三期が『叢書』第三巻(同、昭和六三年)に相当するものである。本叢書は世田谷区立郷土資料館編集になるものであり、その編集を担当している者は、池上博之・鈴木研の両氏と森安彦である。小稿は『叢書』編集刊行事業に携った所産であり、苦勞を共にした池上・鈴木の両氏とその機会を与えてくれた世田谷区教育委員会に感謝するものである。

- (10) 拙著『幕藩制国家の基礎構造』(吉川弘文館、昭和五六年)の第二編第二章「基礎構造の変質と代官農政」彦根藩世田谷領村落の荒廃と再興政策」(二二六～二七五頁)参照。

- (11) 『新修世田谷区史』上巻八六四～八七八頁(東京都世田谷区、昭和三七七年)参照。村上直・根崎光男著『鷹場史料の読み方・調べ方』(雄山閣、昭和六〇年)の「享保期の鷹場制度」(七五～七七頁)参照。

- (12) 拙著前掲書参照(注10)

- (13) 大場弥十郎「公私世田谷年代記」(『世田谷区史料』第一集六七頁、東京都世田谷区、昭和三三年)

- (14) 拙著前掲書(注10)

- (15) 竹内誠「旧里帰農奨励と都市の雇傭労働」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五二年度)

- (16) 拙著前掲書二五八頁(注10)

- (17) 大場弥十郎「自然賛」(『世田谷区史料』第五集一一〇

〽一一四頁、東京都世田谷区、昭和四九年）

- (18) 大場弥十郎「公私世田谷年代記」(『世田谷区史料』第一集一六七頁)

